(3)まだ決められた治療法はないが，選択肢のひとつとしてシクロスポリンも有用と思われた。

36. Castleman 病の1例

大和田高義，斉藤陽久，吉田象二
（国保旭中央）
関　保夫　（同・呼吸器外科）

前縦隔に発生した Castleman's disease の1例を経験した。症例は35歳女性で検診での胸部異常陰影の精査目的に当院受診した。胸部X線写真では右肺門部に腫瘤影を認め，CT では内部濃度均一の，造影効果を伴う，腫瘤性病変認めた。胸腺腫を疑い手術を施行した。病理組織学的にはhyalin-vascular型のCastleman's disease と診断された。文献的考察，及び当院の過去10年の縦隔腫瘍の比較を加えて報告する。

37. シェーンライン・ヘノッホ紫斑病を発症した高齢透析患者の1例

藤原道雄（下都賀総合）

75歳男性。昭和59年より糖尿病にて加療開始。平成8年5月より糖尿病性腎症による慢性腎不全で透析導入。平成12年4月意識消失発作の精査加療のため入院したが有意所見なく，肺炎が指摘され，抗生剤を投与したが増悪傾向となった。その後，四肢に紫斑，腹痛と下血が出現，シェーンライン・ヘノッホ紫斑病と診断した。経気管支肺生検で肺胞出血を認めた。ステロイドパルス療法後IVIGを施行したが奏効せず永眠された。

38. 腹部症状を契機として発見されたループス膀胱炎の2症例

河村治清，高取宏昌，北　靖彦
西川哲男　（横浜労災）

ループス膀胱炎の2例を経験した。2例とも腹痛・嘔吐などでの腹部症状くり返し，CT 上腸管浮腫，腹水貯留，水腎症，膀胱生検にて粘膜下細胞浸潤認め，ループス腹症，ループス膀胱炎と診断。ステロイド投与にて改善をみた。本例では消化器症状を併発した以外には皮膚症状がともにみられないことや抗 DNA 抗体があまり高値でないなどでの共通点がみられた以外は特異的と考えられる症状，所見は認められなかった。

39. 喘鳴のない喘息発作

山崎博臣（山崎内科医院）

呼吸困難を訴えても喘鳴が聴取されないので充分な治療が受けられないとの訴えが増加している。そこで私は気道狭窄が存在する時に必ずしも喘鳴が聴取されるとは限らないことを明らかにすることを目的とした。軽度発作に満たない呼吸困難感を訴えて受診した症例と喘鳴＋36名，喘鳴－71名に分け受診時のピークフロー（予測値に対する%）を比較した。それぞれ51.5%，44.7%で有意差を認めなかった。喘鳴－でも気道狭窄は存在した。

40. マラウイ国サリマでの抗マラリア薬 *in vivo* 感受性試験予報－クロロキン感受性は回復したか？

塚原高広，金子　明
Bwijo A.Bwijo
小早川隆敏
（東京女子医大・国際環境・熱帯医学）
Innocent L.Zungu
（マラウイ国立公衆衛生研究所）
武地美保
（JICA マラウイ公衆衛生プロジェクト）

クロロキン耐性マラリアの増加のため，マラウイでは1993年にクロロキンを中止しスルファドキシン・ペリメサミン（SP）が使われている。上記2剤および多剤耐性マラリアに有効な新薬マラロンを用いて，2000年6月にサリマ地区の熱帯熱マラリア感染小児173例を3群に分けて投与し，血中原虫密度を28日間追跡した。3剤とも高率で原虫除去効果が見られたが，クロロキンの使用中止により原虫の薬剤感受性が回復した可能性がある。

41. 当院における食道静脈瘤に対する EVL・EIS 併用療法の治療成績（第4報）

大久保裕司，井谷　修，佐藤　徹
阿部泰伸，徳政敦子，窪田賢輔
国吉　孝，関　秀一（横浜労災）

〔目的〕食道静脈瘤に対する EVL・EIS 併用療法の有用性と安全性を明らかにする。〔対象〕34例の食道静脈瘤合併肝硬変〔結果〕本療法は再発静脈瘤に，繰り返し行う必要があると思われた。重篤な合併症は無く，経過観察中（12.7カ月）の静脈瘤破裂は無かった。〔結語〕本療法は有用で安全と思われた。